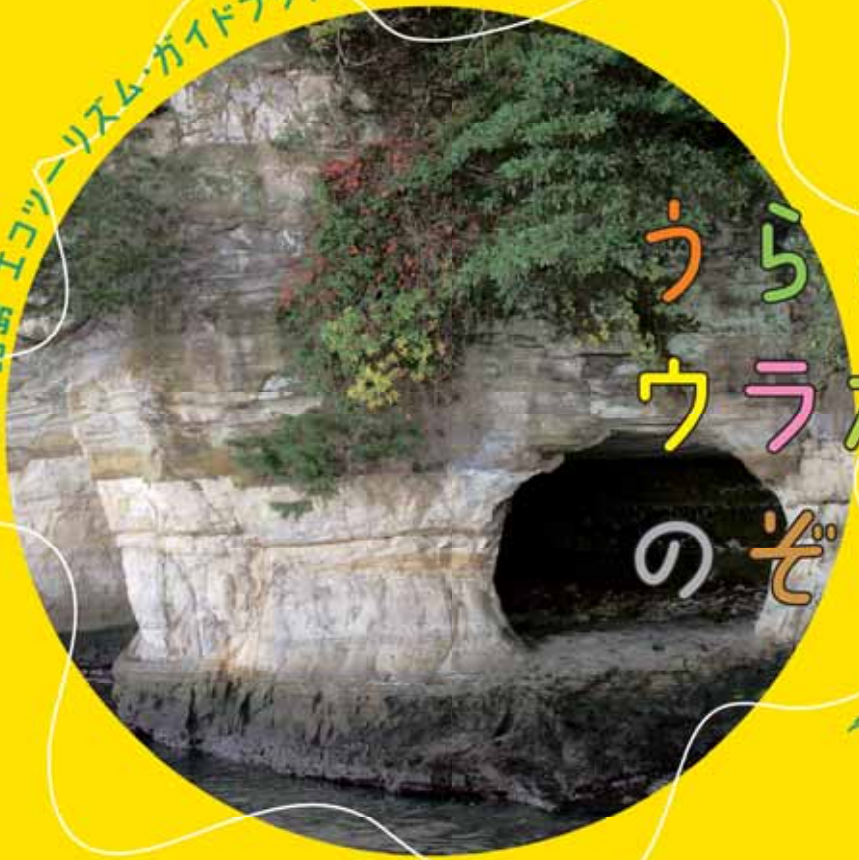
～浦戸諸島 エコツーリズム・ガイドブック～



うらとの ウラガワを のぞこう！

発行：環境省　協力：塩竈市、塩竈市立浦戸第二小学校・浦戸中学校（平成26年3月発行）

編集：公益財団法人日本交通公社　編集サポート：真鍋じゅんこ　撮影：鴇田康則　デザイン：山田果林（スプリングス）・乾洋史（ウッド）

※本冊子は、環境省「平成２５年度 復興エコツーリズム推進モデル事業」の一環として発行されたものです。（リサイクル適正の表示）この印刷物は、Aランクの資材のみを使用しており、印刷用の紙にリサイクルできます。

子どもたちに残したい、伝えたい、“島の宝”ってなんだろう。

浦戸諸島は、松島湾に浮かぶ離島。
人口は約450人、4つの有人島（4島5地区）からなる島々です。

住んでいる人には、当たり前の風景でも
ほんの少し、見方を変えれば
浦戸諸島は、もっともっと、オモシロくなります。

島には、一つだけ学校があります。
小学生と中学生をあわせて、30人ほどの子どもたちがここで学んでいます。

今回、島の学校に通う子どもたちの声をヒントに、
日常生活の中に隠れた浦戸諸島の魅力について考えました。

「島で育つ子どもたちに、島のことをもっと知ってもらいたい。」
「島の大人たちに、島のことをもっと教えてもらいたい。」

そんな思いでこの冊子をつくりました。

ふだん見過ごしている浦戸諸島の“お宝”を探して、
いっしょに、浦戸諸島の裏側をのぞいてみませんか。

Q.海辺に立つ△の標識は何？

A.水道の海底送水管がこの下に埋設されている目印

この標識は、「白色三角標識板」。対岸の島との間に海底送水管やケーブルが敷かれている位置を示し、海上の船が碇を降ろさないよう注意を呼びかける印だ。

浦戸諸島の水道水は、なんと海底にある 6,600m の送水管を使って、本土から届けられているのだ。

今でこそ、水道の蛇口をひねれば水がでるが、島に水道が引かれたのは、1966 年だ。しかし、島の産業であるノリ（海苔）の最盛期になると、ノリを大量に洗うために水が足りなくなり、島ごとに「輪番制」で給水していた。そこで 1979 年に新たに口径の大きい送水管や配水池をつくり、ようやく水不足が解決した。

浦戸諸島の水事情

その昔、浦戸諸島では水はとても貴重だった。浦戸諸島は面積が狭く、河川も湧水もなく、雨水に頼っていたためだ。だから雨の少ない夏や冬になると深刻な水不足に悩まされ、人々の苦労は並大抵のものではなかった。雨降石（石浜）などの信仰があるのはそのためである。

水は、松島湾の海底を通り各島へ

仙台市の大倉ダムや七ヶ宿町の七ヶ宿ダムより取水した水は、浄水場で水道水になって松島湾海底を横断し、桂島に上がる。いったん石浜配水池に貯めて自然流下等により 4 島 5 地区に給水される。

出典:「水と私たちの生活」塩竈市教育委員会

Q.崖下の洞穴は縄文遺跡？

A.現代の島民が使う便利な倉庫「ボラ」

崖下などの岩を手掘りで切り開いた迫力のあるこの洞穴は、野々島をはじめ、各島で見ることができる。島の人たちは、この穴のことを「ボラ」と呼び、昔は防空壕や倉庫などに使われていたという。その歴史や目的は正確には謎だが、その昔、密貿易を行い巨万の富をなした「内海長者の伝説」が野々島にあり、蓄えた富を保管するためにボラが掘られたという説もあることから、少なくとも700年前には存在したらしい。
現在、多くのボラは、民家の倉庫や漁具の資材置き場として利用されている。入り口に扉をつけたり、中に棚をつくったりと、各家庭で工夫されている。

海からしか行けないボラもある

野々島漁港の向かい側にある無人島の柏木島などでは、海に面したボラも見ることができる。舟でしか行けないことから恐らく舟運の時代に活用されていたのだろう。現在の柏木島は、ウミネコたちのすみかで、春になると集団繁殖地（コロニー）となる。秋には日本特産のハマギクが岩肌に開花する。

昔の人が削ってつくったもの

野々島の尾根沿いには、ボラ以外にも昔の人が削ってつくった「切り通し」やそこに設置された「野仏」も見ることができる。浦戸諸島の地層は、第三紀層の凝灰岩、砂岩、礫岩などの侵食に非常にもろい岩質でできており、簡単に削ることができる。観音堂（野々島）の裏にも多数の洞穴が残っている。

写真提供：塩竈市

Q.どうして複雑で入り組んだ海岸線になったの？

A.地球上の気温変化で海水が増減したり、陸が隆起したりを繰り返したため

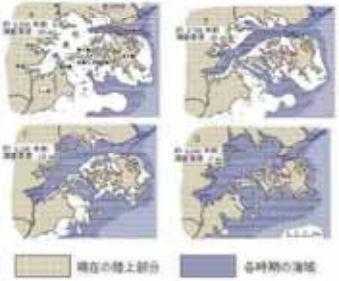
氷河時代、海から蒸発した水分は陸上で氷河や氷床などになって留まり、海水量が減ったことで、当時の海面の高さは今より100mくらい低い位置にあった。そのため約1万年前の松島湾は大部分が陸地で、浦戸諸島や宮戸島も陸続きだった。やがて氷河時代が終わると氷が溶け、海面は急速に上昇してきた。これを「海進（かいしん）」という（逆に海面が下降することを「海退（かいたい）」という）。約8,900年前には、縄文海進により松島丘陵との間に海が侵入して松島湾が形成され、その約300年後には、浦戸諸島と宮戸島などが1つの島として当時の松島湾内に浮んでいた。さらに3,000年かけて海水は増え、島々が分離して多島海が形成された。

奇岩の正体

氷河期後の海進がはじまって5,000年後には、海面はさらに上昇し、最高水位が現在より6mも高かった。地質が浸食されやすい凝灰岩であったことから、多くの島は海面付近が波に削られ、白や灰白色の岩肌を見せている。名勝・松島の景観を特徴付けている奇岩・絶景はこの時代に形成された（後期多島海時代という）。そして再び海退がはじまり、現在の姿となった。

氷河期前の姿

左記の氷河期よりもっと昔には、松島湾は大きな海進や断層運動によって、一時期海面下に没したり再び隆起して海面上に現れたり、浸食を受けるなど、前期多島海時代を形成していた。



出典：「宮城県松島湾の地形形成過程と過去2万年間の海面変化」松本秀明（東北大学大学院理学研究科環境地理学講座）

飾り窓のある家

玄関に丸窓をあしらった家。玄関灯や外壁の仕上げなど、大工さんの心意気を感じる家も多い。島では 1970 年代頃に、家の新築ブームがあったのだ。その背景にあるのがノリ養殖の成功だ。ノリは、島に経済的なゆとりを生んだ。丸い飾り窓はその繁栄の証といえるのかもしれない。

船大工の家づくり

当時、まちから大工がやって来て、次々と家を建てていったそうだ。東松島や東名などから来た船大工も家づくりに腕をふるったという。その頃は、島にもまだ藁葺きの民家も残っていたという話である。

ドラム缶のふた

家の庭先や畑に並んだドラム缶。半球状のフタは何と海に浮かんでいたブイ（浮き）だ。漁師さんはとかく手先が器用で道具を手作りする名人。身近な漁具を再利用して、生活の道具に変身させるのは漁業の島ならでは。そんな日常風景も島の魅力だ。

気になる中身は？

ドラム缶の中身は、畑の貯水タンクや暖房用の灯油入れなど、家庭によって様々である。カラフルなふたが並ぶ姿はインパクト大だが、見慣れるとかわいく思えてくるから不思議。

縄でしばられた地蔵様

江戸時代の寒風沢は、仙台藩の江戸廻米の港として賑わっていた。年貢米をここで千石船に積み替え、江戸の品川港まで運んだのである。その時代には船乗りを相手にした遊郭もあり、客を放したくない遊女が、船が出航できないように荒天を祈った。これが「しばり地蔵」の言い伝えだ。

江戸時代の繁栄を語るもの

しばり地蔵のある日和山は、かつて船出の際に波の状態を観察した場所だ。頂上には「十二支方角石」という直径45cm の円柱状の石がある。天保年間から長い年月を経た現在もほぼ正確に東西南北を示している。

幕末の志士も立ち寄った港

戊辰戦争（1868 年～ 1869 年）の際には、江戸を脱出した榎本武揚、土方歳三ら旧幕府海軍を主体とする勢力が、寒風沢をはじめ浦戸諸島へ寄港している。彼らが函館五稜郭へ向かう途中に一時投錨し、艦を休め、兵を養った港が石浜港だと言われている。

陶器の砲弾の噂

当時使われていた陶器の砲弾が、いまでも石浜のどこかのお宅にあると言われているが、真相はさだかではない。

石浜に残る変わった地名

石浜には、鬼退治の民話に由来した地名が残る。鬼が現れたのが「鬼が浜（おにがはま）」、落とした鬼の首が飛んでいったのが「首浜（しるしはま）」、この首を弔ったのが「頭崎（かしらさき）」だ。

Q.菜の花畑は、何のため？

A.「仙台白菜」の種を採るために栽培している

ゴールデンウィーク頃になると、朴島では、菜の花畑が一面黄色く染まる。この花は観賞用ではない。伝統野菜として近年注目を集める「仙台白菜」の種を採るための畑なのだ。

100 年ほど前、日清戦争に行った兵士が、中国で食べた白菜の種を日本に持ち帰ったのが起源と言われる。持ち帰った種で白菜を育てると、採取された種子は親の性質を引き継がなかった。アブラナ科である白菜は、他のアブラナ科の植物（カブやキャベツなど）と交雑しやすいためだ。そこで、沼倉吉兵衛という人が、他の花粉が届かない桂島の南西にある馬放島（七ヶ浜町）で栽培に成功したのが「仙台白菜」のはじまりだ。

白菜の花粉は、誰が運ぶのか？

白菜をはじめアブラナ科の植物は、自分の花粉では受粉せずに他の株の花粉を必要とする「他家受粉植物」である。チョウやハチなど、訪花昆虫によって花粉が運ばれるのだ。そのため他品種と交雑しやすいという特徴がある。

東京の食料不足を救った仙台白菜

「仙台白菜」は繊維がやわらかく、甘みがあって味が濃い。漬物にすると非常においしい。1923年の関東大震災で大きな被害を受けた東京に、鉄道貨車7両分の仙台白菜が出荷されたという記録がある。震災で生産量が激減した三河島菜に替わり、仙台白菜が全国的に普及した。その後、戦時中に交雑が進み、仙台白菜は市場から姿を消してしまった。

写真提供：塩竈市

Q.港で見かけるホタテの貝殻は何？

A.名産のカキの子ども（種ガキ）を育てるためのベッド

浦戸諸島の港では、大量のホタテの貝殻をよく見かける。これは「原盤」といい、海中を浮遊するカキの幼生を付着させ、種ガキを採るための道具だ。つまりホタテの貝殻が、カキの赤ちゃんを育てるベッドの役割を果たすのである。浦戸諸島のある松島湾は、平均水深がたった3mのとても浅い海である。島々に囲まれ、外洋と隔てられているので湾内は波も穏やか。陸地から流れ込む豊富な栄養を餌に、多様な海の生き物を育む「ゆりかご」となっている。昔から浦戸諸島ではカキやノリなどの浅海養殖漁業が盛んで、品質の良いことで知られている。

カキの育て方

松島湾には300年以上も前から天然のカキが生息していた。カキの天然稚貝を海にまいて育て、決まった日に育ったカキを採取したのがカキ養殖の始まりだという。現在、浦戸諸島で行われている養殖法のひとつが「木架式養殖法」。浅い海の海底に木材の杭を立てて棚状に組み立て、その上に孟宗竹などを渡してイカダを組む。このイカダにホタテの貝殻を針金で連ねた「原盤」をつり下げ、カキをそこに付着させて育てるのだ。

浅海で育つとおいしくなる？！

浦戸産のカキは品質が良く、かつて広島やフランスにまで種ガキを出荷していたという。その秘密は、海が浅いことと潮の干潮にある。カキは干潮時に海上に出ることで成長が抑えられ、身が締まって味わいが増すのだ。

Q.寒風沢にクロメダカが生き残っていたのはなぜ?

A.昔ながらの稲作づくりが行われてきたから

今や絶滅危惧種に指定されているクロメダカ（野生メダカ）だが、震災前の寒風沢に生き残っていたのはなぜだろうか。その秘密は、寒風沢ならではの稲作づくりにある。塩竈市内で唯一稲作が行われている寒風沢は、かつて島民の多くが半農半漁で自給自足の生活を営んだ名残が見られる。島には川がないため、雨水を貯めて米を育てた。水が貴重な寒風沢では、冬でも田んぼからは水を抜かなかったという。冬期も水を張ることで、泥中に棲息する小さな生物たちが土の力を活性化させる。そうしてできた水田は、クロメダカをはじめ、多様な生き物の「すみか」となっていたのだ。

震災前に避難していたクロメダカ

生息する地域ごとに、長い年月をかけて継承された遺伝的な特性（色・形態）が微妙に異なることから、寒風沢のクロメダカは貴重な存在であった。2011 年の東日本大震災の津波で水田は浸水し、クロメダカも絶滅したと思われたが、震災前に一部が島の学校に移されていたため、生き残ることができた。子どもたちはこのクロメダカを大切に育て増やし、寒風沢の水田に帰そうと試みている。

天水で育てた貴重な米でつくる日本酒

震災前より、島の振興を目的に寒風沢で酒米をつくり、その米で塩竈市内の造り酒屋が日本酒をつくる取り組みが行われている。「天水を利用した貯水と天日干し」という昔ながらの農法でつくられた酒米を使ったこの酒は、出荷数に限りがあり、幻の酒となっている（浦霞純米吟醸酒「寒風沢」）。

Q.民家の庭先にある石造りの建物は？

A.野蒜石（のびるいし）を積み上げたノリの乾燥小屋

浦戸諸島の民家の敷地に、独特な石造りの建築物をよく見かける。いわゆるしっくい塗りの蔵とも形態が違い、どれも同じ材質の石材を積み上げているのが特徴だ。聞けば「ノリの乾燥小屋」の名残りで、この小屋の中でストーブを焚き、各漁家で養殖ノリ加工の仕上げに乾燥を行ったそうだ。1960 年代後半～ 1970 年代頃、ノリは高級贈答品として高値で取引されたため、ノリ生産は島の大きな収入源だった。最盛期には出稼ぎの人を含め、家族総出でノリの生産を行った。大型の乾燥機が導入された今はこの乾燥小屋は役目を終え、倉庫や荷物置き場に転用されている。

野蒜石とは

「野蒜石」とは、宮城県の野蒜海岸付近（宮城県東松島市（旧鳴瀬町））から切り出された凝灰岩の石材で、江戸時代末から建築用材として全国に移出された。同じ凝灰石の石材で、塩竈市藤倉付近で切り出されたものが「塩竈石」である。火に強い材質であることから、塩竈市の造り酒屋の石蔵にも使われている。

石浜の白石邸の石蔵

同じように石材を多用した蔵は、石浜集落の白石廣造氏の邸宅跡にも見ることができる。白石氏は塩釜築港や塩竈の発展に力を尽くし、明治4年、石浜に「白石廻漕店（白石商会）」を設立した人物だ。北海道や三陸の各港との廻漕業を興したのをはじめ数々の事業に着手し、遠洋漁業（ラッコ・オットセイ猟）を興した。敷地内には母屋は残っていないが、屋敷の礎石や石蔵、庭園には石垣も残っており当時の繁栄を偲ばせる。

椿のトンネル

島では、3〜5mのヤブツバキが密生している林を見ることができる。黒潮の影響でこうした暖地性植物が見られるのだ。このような照葉の森にいると、一瞬、東北にいることを忘れそうになる。花の見頃は、4月下旬から5月中旬頃。山道は花びらで赤い絨毯を敷いたよう。特に野々島の「椿のトンネル」は見事だ。

椿の実の活用法

昔は、椿の実（種）を絞った油が、「高級食用油」「整髪料」として使われていたほか、灯りなどの「燃料油」としても利用されたため、各地で栽培されていた。椿の実を割ると中から種が出てくる。種の大きさは2㎝ほど。子どもの頃、これに穴をあけて「笛」をつくって遊んだという人もいるだろう。最近、島の学校では、椿の種でストラップを作っている。

神社になぜ鐘が？

「鐘」はお寺にあるものだと思っていたが、浦戸諸島では、鐘突き堂のある神社が多い。調べてみると明治維新以前は、仏教と神道をいっしょに祀る「神仏習合（神仏混淆）」が当たり前の時代だったのだ。長い歴史を持つ浦戸諸島の神社、釣鐘からもその変遷が見てとれる。

鐘つきは3回まで

神社の釣鐘堂には貼紙があり、「鐘つきは３回まで」と書いてある。これは、連続して鳴らすと何かの事故と間違われるためだ。

神社にはキリスト教も！

熊野神社（野々島）は、江戸時代の初め頃の文献にも残されている神社で、隠れキリシタンの伝説が残る「キリシタン仏」が祀られていたという。

船でしか行けない秘密の場所

島の地形は入り組んでおり、細長く伸びる岬には、海からしか行けない静かな入り江や大小の無人島がたくさんある。そこは海上からしかアクセスできない特別な場所だ。海上を自由に移動できる漁師さんだけしか知らない、秘密の場所もあるという。

シーカヤックに最適な湾内

一般の人が湾内を移動するには、シーカヤックが最適だ。湾内は波も穏やかなので、場所によっては初心者でも楽しむことができる。島の学校（浦戸第二小学校・浦戸中学校）では、浦戸合宿というプログラムが毎年開催される。その中でカナディアンカヌー体験なども行われ、海上から学校のある野々島を眺めることができる。

伝説の「宝島」はどこ？

朴島の桟橋を降りると集会所がある。入口の看板を見ると「朴島」ではなく「寶嶌（宝島）」と書いてある。朴島の名前の由来を聞けば、「江戸時代に仙台藩の軍用金や貴重な宝物が隠されていたという伝説があり、宝島（ほおじま）と呼ばれていた」という。

朴島の由来、いろいろ

他にも「伝説の鳳凰（ほうおう）がいたから鳳島」とか、「烽火（のろし）を上げたことから烽島」という説もあるという。浦戸諸島の有人島では一番小さい朴島だが、様々な言い伝えが残る興味深い島である。

Q.定期船に乗り遅れたら島に帰れないの？

A.島の間の渡船や海上タクシーがある

島の生活に欠かせないのが市営汽船（一日 7 便の定期船）だが、それ以外にも無料の渡船や有料の海上タクシーといった交通手段がある。浦戸諸島へは塩釜港から市営汽船に乗る。一番近い桂島へは約 23 分、一番遠い朴島へは約 54 分かかる。島内にはスーパーマーケットやコンビニもないので、買い物はもちろん、病院や学校へ行くためにも島の人は日頃から船を使っている。待合所で汽船を待つ間、顔見知りと会っておしゃべりするのも島暮らしの楽しみだ。汽船が桟橋につくと、島に荷物を届ける宅配屋さんや生活必需品を運ぶ人、軽トラで迎えに来た人など、島の日常を垣間見ることができる。

桟橋で待っていると やってくる渡船

石浜と野々島、野々島と寒風沢を結ぶ無料渡船がある。以前は、桟橋で旗を揚げると渡船がやって来たが、現在は文明の利器（携帯電話）を使う。汽船は運航時間が決まっているが、渡船は営業時間内であれば、電話をかければいつでも来てくれる。なお、急ぎの場合は海上タクシーという便利な乗り物もある。

島の常識「船勉（ふなべん）」

野々島にある浦戸第二小学校・浦戸中学校に通っている子どもの多くは、船を使って通学している。桟橋で「おはようございます」「さようなら」と元気に礼儀正しく挨拶する姿が印象的だ。子どもたちは船の中でも予習・復習をしたり、宿題をしたりと勉強熱心。「ふなべん」と聞いてお弁当を食べるのかと思ったら、船の中で勉強することだった。

Q.なぜ暖地性植物のタブノキが？

A.沖の黒潮のおかげで本土より暖かいため

島でよく見かけるタブ林やヤブツバキ林などは、一般的には関東以西の暖かい土地に生える常緑広葉樹である。なぜ、東北地方でこのような暖地性植物を多く見ることができるのだろうか。島の人に聞くと、「同じ塩竈市内でも本土より、島の方が暖かいからだ」と言う。周囲を海で囲まれた浦戸諸島は太平洋の暖流、黒潮の影響を受ける海洋性気候で、1年の平均気温が12度と暖かく、厳冬下でも零下になることは少ない。そのため宮城県内でも希少な植生を持つ地域となっている。寒風沢の神明社境内や朴島に見られるタブ林は、自然保護の観点からも重要だ。

松崎神社のタブノキの大木

タブノキの大木が茂る鎮守の杜と言えば、桂島にある松崎神社だ。この神社は鹽竈神社の末社で、いわゆる「お竈様」が祀られている。杜の中は昼でもうっそうとしていて、この境内に刃物を持って入れば天罰が下るという言い伝えもある。

浦戸諸島の土壌と植生

島の土壌は凝灰岩が主体で、その上に薄く土が乗っている。だから土は乾燥していて養分が乏しい。そのため、このような土壌環境に耐えることのできるマツ類も多く見られる。特に丘陵部にはアカマツ林、島の周縁部にはクロマツ林が見られる。クロマツは、アカマツに比べ潮風に強いが土壌の乾燥・貧栄養・酸性に耐える性質は弱い。クロマツは、修景等のために海水浴場周辺に多く植えられたが、東日本大震災の津波で流されたり、立ち枯れたりしてしまった。

Q.名勝松島に浮かぶ島々を歩けるって本当？

A.松島湾に浮かぶ浦戸諸島を歩けば、松島を“逆から”望むことができる

松島に行ったことのある人は多いが、松島湾に浮かぶ島々を訪れたことがある人はどのくらいいるだろうか？日本三景の松島湾に浮かぶ島々、その中心が浦戸諸島だ。桂島・石浜・野々島・寒風沢・朴島の５地区からなる浦戸諸島には、205世帯438人（平成25年11月現在）が住んでいる。自然豊かな島々は、塩釜港から船で約30分。船でアイランドホッピング（島巡り）を楽しむには、ちょうど良い距離である。東京から最も（時間距離が）近い離島と紹介されることもある。島の高台からは、松島湾を一望することができる。桂島の展望台からは仁王島、天気が良ければ遠くに奥羽山脈を望むことができる。

歩きたくなる生活の道

島には、漁港の路地や人が歩けるだけの道幅の尾根道など、つい寄り道したくなるような生活の道が多い。島人と挨拶をかわしながら歩けば、島の温もりにふれることができる。島で一番高い津森山（桂島）でさえ、標高 61m なのだから、登山というより軽めのトレッキングだ。「丘の上の畑に水や肥料をどうやって運んでいるのだろう」と思ったら、ちょうど軽トラック１台分が通れる道があった。島ですれ違う車のほとんどは、軽トラだ。

島歩きの心得

島歩きには、ちょっとした心構えが必要。島は生活の場であることに配慮し、島の人に会ったら必ず挨拶することだ。お弁当や飲み物は自分で用意し、ゴミは必ず持ち帰るのがルール。また、震災後は、トイレや待合所が仮復旧であることに留意しなければならない。もちろん、野山の植物や田畑の農作物を傷つけたり、持ち帰ったりするのは論外だ。

子どもから見た浦戸諸島の魅力とは？

「私が島を案内する特別な一日」

“もし、あなたの大切な人（家族や友人）が
島に遊びにくるとしたら、
あなたはどこを案内しますか？”

浦戸諸島唯一の学校に通う子どもたちは、島をどう感じているのだろうか。2013年11月27日、野々島にある浦戸第二小学校・浦戸中学校（小中併設校）におじゃまして、子どもたちに浦戸諸島の魅力を教えてもらった。放課後、集まってくれたのは、小学５年生から中学３年の子どもたち。事前のアンケート結果をもとに「（家族や友人が島に来たら）案内したい場所」「そこでやりたいこと」など聞くと、模造紙いっぱいのコメントが集まった。

小学校5・6年生のグループ

- ツバキロードで採れた椿の種をつかってストラップやブレスレットをつくると楽しい。油は教室のドアの滑りをよくするんだよ。
- ツバキロードには人型の土の塊がある（ミイラかな？）。
- 桂島の海水浴場が好き。穴を掘って水をいれて遊ぶ。
- カキ剥き名人（地元のおじいちゃん、おばあちゃん）に先生になってもらい、カキ剥きを教わる（体験の日（学校行事）でやった）。
- 島の夏祭。学校のみんなと、締太鼓の演奏をしたよ。
- 陰田島（かげたじま）を、こっそり「ハゲタ島」と呼んでいる。
- ラベンダー畑には、カマキリやカエルがいっぱいいる！
- 松崎神社で鐘を鳴らすと面白い。鐘は熊野神社にもある。
- 仁王島。（震災の影響で補強した）コンクリートの部分が首輪みたい。島の形は、まるでガンダムにでてくるホワイトベースだ。
- 冬、学校の校庭でやる雪合戦は最高！

中学1年生のグループ

- 景色が良いので、風景写真を撮りながら歩くのがオススメ。
- 島の夕日。ラベンダー畑もキレイ。
- スターボード（ペンション）でお昼ごはん。島に食堂はないので、食事ができる貴重な場所。シーフードカレーがおいしい。
- 釣りに連れて行く。防波堤で糸を垂らせば、ハゼやカレイの小さいのが釣れる。アイナメは船で沖にでれば釣れるよ（釣り大好き）。
- 船でなら、夜釣りもおもしろい。寒風沢と野々島の間でハモが釣れる。餌はイカ（注：このあたりでは、アナゴのことをハモという）。
- 部活で走りに行く宇内浜。潮が引くとアサリがとれる。
- 旧浦戸第一小学校から見る星が、すっごくきれい。
- トトロが出そうな松崎神社のタブの森。セミの抜け殻がいっぱい。
- 島にはタヌキがいる。港には野良ネコも。

中学2・3年生のグループ

- 桂島の桟橋から見える360°の風景。漁業の仕事をしている人がいて、生活感がある風景もいい。
- 野々島のツバキロード（学校の避難訓練で通る）。
- 学校の近くにある「海の見える丘」。ブランコもある。
- 自然に囲まれている宇内浜。海の音しか聞こえない。
- 絶滅危惧種のクロメダカ。探せばまだ寒風沢にいるかも。
- 住んでいる人は少ないが、朴島には広い菜の花畑がある。
- 「わせねでや」。島で唯一のお店。
- 青空の下のカキ棚、島ならではの風景。冬の浦戸もいい。
- 独特のボラ（洞穴）。防空壕？今は倉庫。
- ブルーセンター前の不思議な自販機（夏に、冷たいジュースを押すと、熱～いコーヒーが出てくる?!）。

島の学校って、どんなところ？

～浦戸第二小学校・浦戸中学校～

島の学校は、小中あわせて生徒数29名（うち、26名は島外から通う）、アットホームな雰囲気だ。かつては、旧浦戸第一小学校（寒風沢）、旧浦戸第二小学校（桂島）の二つの小学校があった。しかし生徒数減少に伴い、第一小と第二小が統合され、その後中学校内に移転する形での、今の浦戸第二小学校がある。島の人たちの学校への期待は大きく、「学校こそ島の宝なんだよ」と話すのは、寒風沢区長の島津さん。保護者だけでは大変な通学路清掃や学校行事の手伝いなど、島の人たちは協力を惜しまない。学校行事になれば、島の人たちも一緒に参加する。子どもたちも、運動会や文化祭の際には一軒一軒を訪問し、案内状を手渡ししている。島の“宝”は、こうした互いを思う気持ちや努力で支えられているのだ。

子どもたちに聞いてみました！

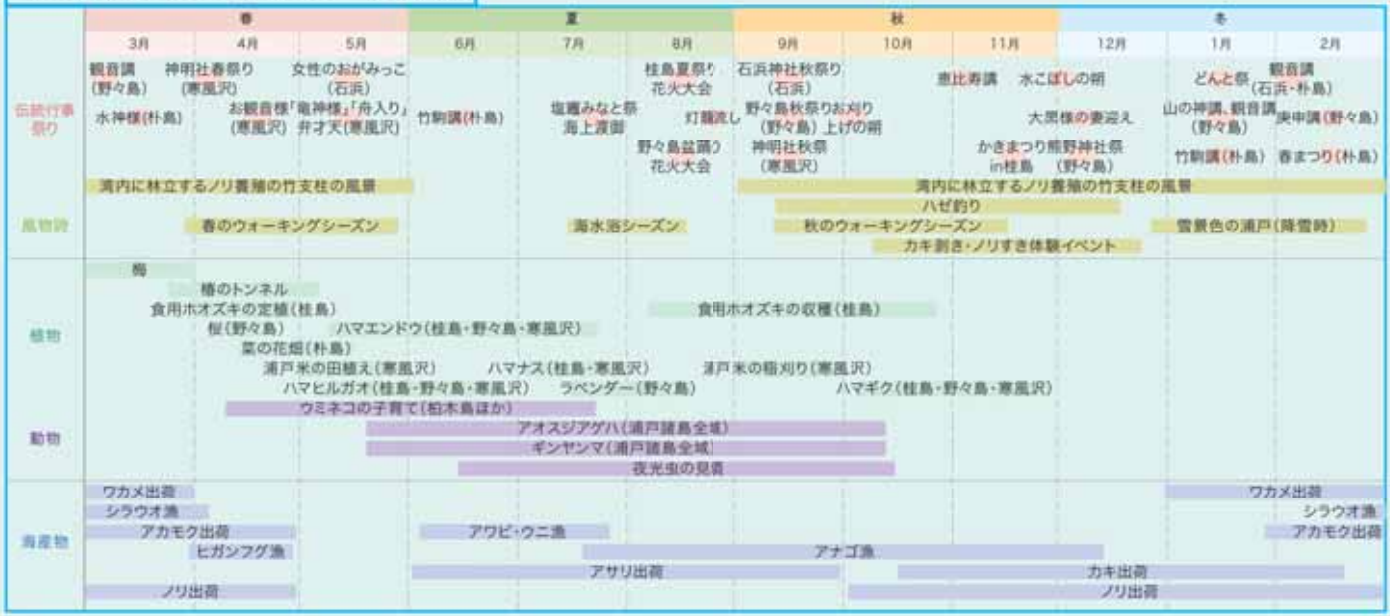
～アンケート結果より抜粋～

島での学校生活で楽しみにしていることは？

島の自慢話を教えてください

- 島では、誰にでもあいさつをする。
- 島の人がやさしいこと。島の人がお互いに助け合っていること。
- 浦戸は仙台白菜のふるさと。ゴールデンウィークには満開の菜の花。
- カキやノリがおいしい。
- 魚がたくさん釣れる。寒風沢にしかいないクロメダカ。
- あちこちに無人島がある！
- 各島に伝説や言い伝えがある。

浦戸諸島フェノロジーカレンダー（季節暦）



さっそくその夜、漁師民宿で海の恩恵をうけた。食卓には、素潜りや刺し網で採ったアワビやニシガイの刺身にアイナメの塩焼き、エイの煮付けに茹でシャコ。

きわめつけはご主人が潜って採ったムラサキウニだ。教えられた通りに殻に清酒を注げばウニ酒と相成る。ウワー、おいしい！　あまりの私たちの興奮ぶりに、「そんなに喜んでくれるの？　そこの海にあるものばかりよ」と、奥さんは笑う。

ふたたび初冬に島を訪れると、水産加工場では女性たちがカキを手際よくむいていた。正月にはハゼの焼き干しをダシに雑煮を作るという。これはもう、季節ごとに通って食べまくらねば。

島を歩くと、島の人が甘露煮にする緑色のイチジクの実をよく見かけた。山道には山グルミやヤブツバキの実もたくさん落ちている。クルミ餅や椿油の原料だなどと考えてはっと気づいた。

松島湾一帯は国内有数の貝塚遺跡密集地域だ。帰宅後、当時の縄文人が食べたものを調べて笑ってしまった。山菜にキノコに木の実、アサリにカキにアイナメ、マグロ。私は数千年来の浦戸名物に舌鼓を打っていたのだ。

大昔からおいしい島

日本三景のひとつ、松島には人が住む島もある。それらの島々、浦戸諸島行き塩竈市営汽船に乗ってみた。桂島、石浜、野々島、寒風沢、朴島と港に着くたびに、地元の人たちといっしょに宅急便や生協の荷物も降ろされる。はっぴ姿の男性は、「消防団です。塩竈での会合帰りです」という。江戸の昔から俳人の松尾芭蕉や旅人たちが見とれた風景の中に、本当に日常生活があるのだ。

船上から間近に見える奇岩や断崖絶壁は迫力だ。聞けばこのあたりは凝灰岩というもろい地質で、波の浸食で形作られたのだという。外海に面した岩肌は、荒波でくずれては砂となって浜辺ができた。文字通り身を削って景観を生み出すとは、松島もけなげだなあ。

松島湾自体は島や半島に囲まれた穏やかで浅い海だ。魚たちはのびのびと泳いで、カキやノリを養殖すれば陸地からこぼれた植物性プランクトンを栄養に、うま味たっぷりに育つ。朴島の漁師いわく「この辺で作っているのは種ガキです」。まさに魚介のゆりかごなのだ。

眞鍋じゅんこ
フリーライター
写真家の夫、鳩田康則と共に、長年国内外を旅しながら人の生活を記録。全国の村や漁師町、食文化などを取材しては雑誌や著書、講演などで発表している。NHK文化センター講師。水産庁「お魚かたりべ」。主な著書は『ニッポンの村へゆこう』(筑摩書房)『うまい江戸前漁師町』(中古民家主義)(共に交通新聞社)など。

た。野々島の尾根には、椿のトンネルや岩盤を器用に削った切り通しが続く。何だかおとぎ話の迷路みたいだ。

野々島の対岸、桂島北端の石浜港には、諸島唯一の郵便局がある。不思議だったが歴史書を見て合点した。明治時代、神戸～横浜～小樽航路の日本郵船が郵便物を積んで寄港した時期があったのだ。その頃の船は大型化、寒風沢港より深い石浜港が活躍したのである。小さな郵便局もまた、島が文明の入口であったことを物語っているのかもしれない。

郵便局の前で、散歩中の地元のおかあさんと合流した。「午後はこの道がいいの」という通り、集落から島の尾根道に出ると、パッと視界が開けて温かな日差しが広がった。空が大きい。

大津波でさらわれた風景は切ないが、道はやがて桂島集落へ。私はここで島唯一の商店に立ち寄るのが楽しみだ。イスに腰掛けて缶コーヒーを飲むと、店の奥さんが自作の歌をご披露してくれた。のどかな島時間につい身をゆだねては塩竈への船着き場へと急ぎ足、私の浦戸諸島歩きの締めくくりだ。

船でピョンピョン行き来する

マリンゲートから市営汽船で数十分。浦戸諸島は市の端っこだなあと思う。ところがこれは鉄道や自動車に乗る現代人の発想だ。江戸時代まで人は街道を歩き、重い貨物は船で運ばれた。すると地図を見る目がくるっとひっくり返る。船にとって塩竈の入口は、むしろ太平洋に面した島々なのだ。

ことに江戸時代に栄えたのが寒風沢だ。徳川家康が太平洋の東廻り航路を整備させたため、北から南から続々と船が往来。周辺部の物資は小舟で寒風沢に運ばれて大型船に積み替えた。風待ち港の役目も担った。花のお江戸や仙台藩と直結した小島に、さぞや華やかな文明がもたらされたことだろう。

この港を見いだしたのは、はるか南の千葉県出身の長南和泉衛で、現在も長南姓の家がある。さらに「先代が豊富な魚を求めて千葉県から移住した」という島民にも出会った。海の男たちは私たちの想像を越えた大きな世界を自由に闊歩する。実際、島民にとって船は日常の足で、隣島とは無料渡船で行き来している。

私たちも船を乗り継いで島々を歩い

浦戸諸島 Urato Islands

（宮城県塩竈市）

※「桂島」「石浜」「野々島」「寒風沢」「朴島」は地区名